



「ねえ」

僕は傍らの彼女に声をかけた。僕らはリビングでくつろいでいた。彼女はテレビを見ていた。

「ひとつ聞いていい？」

「何？」

彼女は振り返らずに言った。僕は彼女の背中を見ていた。

「それ、面白い？」

「何が？」

「テレビ番組」

「……普通」

彼女はテレビを見ていた。テレビの中では、芸人が何事かを話していた。楽しそうに。

「どうしてだろうね？」

僕は言った。「何が？」　彼女はめんどくさそうに言った。

「いや、色々な事が」

「何の話よ？ ルリちゃん？」

ルリちゃんとは、彼女の友人で、以前、ルリちゃんをきっかけに軽い喧嘩をした。だが、その事ではない。

「違うよ。いろんな事」

僕はテーブルの上のコーヒーカップを取り上げた。彼女の視界に入るように、カップを軽く振った。

「例えば、このコーヒーカップ。僕はコーヒーを飲む時、カップの存在を疑わない」

「それが？」

彼女はまだ『テレビ』を見ていた。

「どうしてだろうね？ いつも、思うんだ？ カップの存在を疑う事ができる。でもそうしたら、僕は素直にコーヒーを飲めなくなってしまう」

「変人なのよ、あなたが」

「それは相対的な話さ。そうじゃない。本当はそうじゃない。僕は至極真っ当——」

彼女がぐるりと振り向いた。僕の間を見て

「変人なのよ」

強く言った。またテレビに視線を戻した。僕は...変人じゃないぜ。多分。

「そうかな」

「そうよ」

「.....そんな事もないだろう。もし僕が変人だったら.....」

「間違いないわよ」

彼女は断言した。僕は口を噤んだ。

その夜、僕らは一つのベッドに横になった。彼女は僕の腕に頭をのせていた。

「ねえ、さっきの話だけど」

僕は言ってみた。彼女は目を瞑っていた。

「僕は変人じゃないよ」

「嘘つき」

「本当さ。変人じゃない。だけど、それを証明する術がないだけだ」

「一体、どうやって証明するつもりなの？」

「さあね。ただ、今度、神様に会ったら、証明できると思う。僕は変な奴じゃないって」

「神様に会った事があるの？」

「一度だけ。髭もじゃだったよ」

その後、僕らは形而上学的な話はしなかった。僕らは仲睦まじく、一つのベッドに寝た。

...翌朝、僕らはコーヒーの粉の事で軽い喧嘩をした。僕が昨日買ってきたコーヒー粉が気に入らないらしかった。

「いつものにしてって言ったのに」

彼女は怒っていた。

「売り切れててさ」

僕は嘘をついた。

それでも、僕らは一つのテーブルでコーヒーをすすった。僕にはそれほどまずいコーヒーと思えなかった。

その時、僕はコーヒーカップの存在を疑ったりしなかった。彼女の存在も疑わなかったし、万有引力の法則、彼女が通っている会社や、日本円が通貨として機能するシステム、大地の存在など諸々を疑わなかった。僕は、疑わなかった。

僕はコーヒーを飲んだ。全ては順調であるように思えた。「もう準備しないと」 彼女は言った。最初、『何』を準備するのだろうか?と思ったが、すぐ、彼女が『通っている』会社の話だと気付いた。

「ああ、そうだね」

「あなたも準備をしないと」

一体、何を準備するんだ？ 一体、何を、どこに向かって準備するんだ？ 一体、何を？ そう言  
いたかったけれど、僕はぐっとその言葉を飲み込んだ。

「うん、そうだね。準備する」

僕は準備を始めた。

準備を始めた。

## 準備

<http://p.booklog.jp/book/121287>

著者：ヤマダヒフミ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamadahifumi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/121287>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト